

# 編集後記

▼文部省は「子どもたちの学力は概ね良好」と強がっているが、子どもたちは「文章を読みながら状況を判断して操作する」学習をあらかじめ拒否している状況にあり、世界の中で

日本の大人が「科学の知識」「科学・技術への関心」のレベルで特筆にあたいするほど低いことに連動しているという指摘(片岡氏論文)は「極度に競争的な日本の教育システム」が国民の「学力の剥落」を引き起こしているという問題の国民的論議の手始めにならないか。

▼桑名氏は過密ダイヤで動く新幹線のように子どもと教師の実態をスケッチしてくれた。達成できない学習内容が朝学習・家庭学習へ。子どもの実態抜きの教育課程に怒りがわく。

▼小林朗氏は中学校における教育内容とその学習の定着度を規定するきわめて強い拘束力をもった新カリキュラムの問題点を手厳しく抉り出している。また「学力をどう考えるか」についての氏の考察も是非読んでほしい。

▼小島氏は高校理科教育のゆがんだ二極化の背景を小中高の指導要領を分析的に描いて「理科嫌い」は文教政策がつくりだしていることを教えている。

▼小林昭三氏は日本はもはや世界平均よりか

なり下位にある「勉強をしない国」だという。

大学入試制度の歪みが大きく影響しており、日本の「知的な営み」の危機であり、諸外国の取組とは逆行した状況下にあると言っ。克服のためには文教政策の大転換が必要という提言に同感。

▼さきの国会で小泉内閣が策定した「教育三法」を緊急に小特集に組んだ。問題だらけという感が深い。

▼河合氏の指摘は改悪地方教育行政法の「不適格教員問題」論議の原点だ。

▼高橋氏が「奉仕活動」についての教育国民会議総括責任者曾野綾子氏の国家主義的人権感覚ゼロの子ども観を紹介している。

▼上杉氏は「出席停止」ではよくなつてゆきようなない状況に追い込まれている子どもたちの現実を見据えての生徒・保護者・教師三者連帯の学校づくりこそ、真の解決への道という。

▼三井氏はこれまで諸施策が高校間格差を促進してきたこと、法の成立で、それが県民の階層文化の固定化にさらに拍車をかけると予測している。

▼堀尾氏が著した岩波新書『現代社会と教育』を参考文獻として紹介したい。

▼植木氏は北欧の国々の市民レベルの組織が権利主体としての自覚をもって公的機関に関

わりを持ち奮闘していることを紹介している。社会福祉等の実効性を左右する問題として。

▼佐藤氏の報告ではじめて「無駄な大型公共事業」というものの身近な例を知った。それにしても私たちは何も知らされなさすぎる。

▼樋川氏日記、八木氏の論考は戦争末期の中等教育における総力戦体制と実態をコンパクトに整理し、位置つけた点で貴重。

▼組合役員選挙への「学閥」(教員派閥)の隠微な干渉の実態を見た。弁護士中村氏の発言のように憲法を学んでいる子どもたちにも言えない「労働組合存立の基盤を侵す」不当労働行為だ。(本田)

## にいがたの教育情報 NO. 67

2001年9月25日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明

〒951-8116 新潟市東中通1-86 山崎ビル

電話・FAX (025) 228-2924

振替口座・00640-0-12332

印刷所・中央印刷さびず

本誌内容の無断転載を禁じます。